

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第446号 2019年5月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

朝の道 水戸部 修治

朝もやの中を歩くのが好きだ。

初めての道はもちろん、日ごろ
 通い慣れている道でも、ゆっくり
 と歩くことで初めて気付くことが
 ある。朝という時間は、とりわけ
 その気付きの感度を高めてくれる
 らしい。

故郷の道を歩くときはなおさら
 である。小さい頃よく遊んだ草の
 生い茂った砂利道は、広い舗装道
 路になってしまったけれど、周り
 の風景や果樹の畑の連なりは、ま
 るで時間が止まったかのようにか
 つての面影を色濃く残してくれて
 いる。

脇道を見つけて進んでいくと、

リンゴの木に白い花が咲き始めて
 いる。長い冬をじつと耐えていた
 樹々が、満を持していつせいに可
 憐な花をつける。ラフランス、和
 ナシ、スモモ、そしてサクランボ
 ……。青い空に映える果樹の白い
 花々は、北国の長い冬を乗り越え、
 春の到来を告げる生命の息吹にも
 似ている。

ずいぶん以前のこと、季節は夏
 の初め頃だったろう。そうした故
 郷の道を歩いた折、早朝の葡萄畑
 を進んでいくと、ばたばたと音が
 する。何となく気になって立ち止
 まり、様子をうかがうと、雌のキ
 ジが一羽、羽をばたつかせながら
 道を横切って走って行くのが目に

入った。
 けがをしている。
 そのように見える走りぶりであ
 った。じつとしていけば見つかる
 こともないのに、そう思いながら
 一瞬、あとを追いかけていこうと
 足を止めた。キジの走っていく方
 向とは逆の方から、かすかな音が
 するのだ。

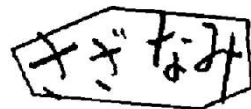
そつとその音の方に進んでいく
 と、キジのヒナが二羽ほど隠れて
 いるのが見えた。

私は、はつとした。先ほどの雌
 キジは、けがをしていたのではな
 かったのだ。近づいてくる人間に
 気付き、ヒナから遠ざけるために
 自らをおとりに使って、注意を
 そらそうとしたのだ。

確かに、傷を負っているような
 そして、敵が見れば容易に捕ら
 えることができそうな走り方をし
 ていた。歩くことも忘れて、しば
 らく母キジとヒナたちを少し離れ
 たところから見つめていた。

母キジは、本能的に子どもを守
 るための行動を取ったのかもしれ
 ない。しかしその行動は、とても
 尊いものに思えた。命の輝きと力
 強さとをかいま見た思いであっ
 た。

(京都女子大学
 発達教育学部教授)



▼小耳に挟んだちよ
 っといいはなし。話
 題は4月の始業式の
 こと。「今度の先生、
 しつかりと教えてく
 れそう」と笑顔のお
 母さん。「どうして
 そう思うの」ともう
 ひとりのお母さんが

質問。「宿題は、学校で覚えた丁
 寧な挨拶の仕方をおうちですること」
 「教えてもらった通りにそつ
 くり真似をして私に見せて挨拶し
 てくれたの」とうれしさがこみ上
 げてくる様子▼4月。新年度の始
 業式。その子の学校では、校長先
 生が「みなさんで力を合わせてな
 かよくなる学校にしましょう」と
 いうお話をされた。それを受けて
 教頭先生が具体的に挨拶の大切さ
 にふれ、国語部の先生が壇上で手
 本を示されるといふ念の入れよう
 だったという▼その子は、今年こ
 そと気合いを入れて登校し、心に
 届いたのが挨拶だったことはお母
 さんの笑顔から理解できた。それ
 だけでなく、行動まで気持ちをは
 かめたのは、始業式の主な学習内
 容である挨拶を教室で指導をされ
 たであろう「おうちでも挨拶をし
 ましょう」という宿題である。お
 母さん方の会話や雰囲気から推察
 すると、担任の先生が改めて、始
 業式の内容を教え考えさせられた
 ということである。「子どもは理
 解できたであろう」という思い込
 みだけでなく、教室でみんなで考
 える視点を持った学級担任の知恵
 が子を育てお母さんの笑顔の源に
 思えた。

(吉永幸司)

学級会による
自治能力の向上
川端 由紀

今年度は、教務を任命され、年度当初は戸惑う日々でありました。その中で、仲間作り部会(特活)の長も同時に任命され、特活というものを見直してみました。今、日本は、成長社会から成熟社会に移行したと言われています。私自身、十数年にわたる民間企業勤務の経験から、その通りになってきているなと実感しております。社会の構造の変化、派遣社員や働き方改革と言った働き方の変化も、ここ数年で顕著になってきました。そんな社会変化を目の前にして、今後必要になってくるのは、個としてのあり様や成長だと思えます。個として自立し、依存的不是ではなく、主体的に生きていくということが大切な時代になってきたのだと思います。

そこで私は、開かれた人間を作っていくことが大切だと思いました。開かれた人間とは、ひたむきに、自分も成長しながら、他者の存在を受け入れることにより、自分の力へと他者の存在をより戻す。そして、自分もふくらみ、成長する姿です。また、問題があっても、問題と感じない無気力な人間ではなく、問題を解決したいと

思う人間を育てたいと思えました。たとえ小さな問題でも自分たちの問題を自分たちで見つけ、自分たちで解決することができるという実感を味わわせたいと思えました。そのためには、特活として、主に学級活動、児童会活動がありますが、生活作りのための学級活動、特に「学級会」に学校をあげて力を入れていこうと考えました。

①学級集団への愛着がわく②集団生活の問題に気付く目を育てる③自分たちで解決可能であるという自信と問題解決までの見通しをもつ④3つの項目が、学級会を行うことよって得られる力だと思えます。また、学級会によって、話し合いの技術はもとより、相手の意見を尊重する態度をしっかりと身に付けさせたいです。相手の意見し、少数意見にも配慮しつつ、話し合いで折り合いを付けていくことができるようになることも学級会の積み重ねによって得られる力であると思うからです。そして、月二回以上の実践と振り返りにより、学級会の定着を図っていきたいと思えます。

学級会に力を入れ、継続的に行うことで、社会性や自治的な能力を身に付け、子どもたちを開かれた人間へと導いていきたいです。

(参考文献
「特別活動の教育技術」杉田洋
(大津市立石山小学校)

作文指導のアイデア
(一年生)
北島 雅晴

何かが完成すると、とても喜び、一年生。できたことが自信となり、次の活動のやる気を生み出します。一年生は、この「できた喜び」を大切にしたいです。一年生は、発見したこと、うれしかったこと、びっくりしたこと、うれしかったこと、すぐに身近な人に話したくなります。先生が、聞き手になることが大切です。

一学期前半は、文章を書くことが難しいので、絵を描いてそれをもとに話をすることから始めます。特に、一年生の保護者は進んで協力してくださるので、我が子と話をすることをお願いします。

◆題材「いきものとなかよし」
身近な生き物のことなら、だれもが喜んで話をしてくれます。身近な人や生き物は、一年生にとって大事な作文の題材となります。生き物の話を十分にしたらとところで、今話したことを絵に描きます。その絵を家にもって帰り、おうちのひとと話をします。話したことを保護者に書いてもらおうと絵日記が完成します。

〇いぬをかっています。なまえはたろうです。ぼくがかんがえました。えさをやっても、えさをいつもたべないから、ぼっきーみたいなのをやるとたべます。えさをた

べおわったらぼーるあそびをします。このように一学期前半は、子どもとおうちのひとの共同作業で学習を進めることも多いです。

夏休みを過ぎると、自力で文章を書くことに抵抗がなくなってきました。いろいろなことに目を向けて書くような働きかけをします。

◆題材「〇〇とはなしたよ」
「自分のすきなものといっぱい話をしようね。」
という投げかけの中で始めました。

〇きんぎよとしゃべったよ
ぼくはおかあさんと、きんぎよの水かえをしました。つぎに、きんぎよにしゃべりかけました。
「おまえらは、なにがとくい。」
「ぼくはぼくがとくい。」

「水をきれいにしてあげる。」
きんぎよは、またぼくはぼくといきました。

「きみは、なにがとくい。」
と、きいたみたいでした。
「やきゅう。」
と、いいました。しゃべったときは、いいきもちでした。

二学期から三学期にかけて、生活文以外にも、お話づくり、手紙、詩など、いろいろな文章を書くことができるようになります。

「どんな文でも書くことができるよ。書くことが楽しい。」
という自信とやる気をもって、二年生に進級してほしいと思えます。

(前草津市立志津小学校)

全校で取り組む書く活動
西條 陽之

小野小学校では午後の始業前の十分間をのびっこタイムとしてい... 昨年度までは、国語、算数、そして外国語活動と曜日によって異なる教科の学習に取り組んでいたが、本年度は、外国語活動の時間確保に合わせ、毎日ののびっこタイムで国語科が実施される運びとなった。これは、ある意味チャンスである。十分間に刻まれたとは言え、全学年が一斉に国語科の学習をする時間が確保できるのである。これを子どもたちの意欲に変えない手はない。

本校の研究教科も国語科であり、子どもたちが夢中になって考える授業の創造を目指して今年で二年目となる。記述式の設問になると途端に書けなくなる、原稿用紙の使い方が習熟しないまま卒業文集制作を迎えているなど、本校の子どもたちが抱える課題もあった。ただし、作文トレーニングのようにひたすら書くだけでは辛い作業になりかねない。そこで以下のようない取り組みのモデルを提示することとなった。

① 全校で同じテーマの作文に取り組む。
② 書いたための土台を作る

一休感を生み出したという思いがあった。書くための土台を作る。テーマは一貫しているが学年の実態によってできることは異なってくる。もちろん一年生はひらがな・カタカナの習得がまず重んじられなければならないし、いきなり作文をしましょうなどとはいかない。そこで、実践例として、曜日毎の活動を示し、教師間での共通理解を図った。

テーマは二週間縛りとし、月曜は文字の学習、火曜はテーマについてペアトークで深める、水曜は実際に書いてみる、木曜は書いたものを音読や交換して読んでみる、金曜は添削を受けて推敲し、作文を完成させる。という流れである。テーマについていきなり書くのではなく、話し合いで考えを広げ、書きたいという思いを引き出してから作文に向かうことができるのではないだろうか。一つのテーマに2週間の期間を使うことで、十分間では書ききれない子のフォロワーもでき、原稿用紙の使い方についても一人一人の書きぶりにじっくり向き合うことができ

③ 共有の場を設ける
作文は誰かに読まれることで完成する。各学年で磨かれた作文をひと所に掲示していく。各学年の実態や子どもたちのしさを鑑賞したり、書くことへのエンパワメントな場にしていきたい。
学校全体で取り組む風土づくりが夢中になって作文を書く子ども姿につながるか、今年の勝負が始まった。
(大津市立小野小学校)

「読み解く力」向上
フォーラムに参加して
北川 雅士

本年度から滋賀県の学ぶ力向上プラン「読み解く力プロジェクト」の推進委員として年数回の研修と研究に参加できることとなった。この「読み解く力プロジェクト」は県の学ぶ力向上滋賀プランの「読み解く力」の育成に向けて、各市町から選ばれた教員で研究チームを作り、総合教育センター研究員の方々と、読み解く力向上のための授業のあり方について実践的な研究を進めるものである。5月9日には「読み解く力」向上フォーラムとして滋賀県庁にて講演会が開かれた。まず、「読み解く力」とは社会で生きていくために必要な「読み解く力」を身に付けることを目指すもので、主に「文章や図、グラフから情報を読み解き理解する力」と「相手の言葉や表情から考えや意図を読み解き理解する力」の二つの側面をもつということ。そして読み解く力には、「必要な情報を確かに取り出す(発見・蓄積)」「情報を比較し、関連付けて整理する(分析・整理)」「自分なりに解決し、知識で再構築する(理解・再構築)」という3つのプロセスがあると考

え県全体で「読み解く力」の育成に取り組んでいくことの説明を受け、2名の先生の講演とパネルディスカッションをお聞きした。
東京大学の藤江康彦先生からは、「読み解く力」と21世紀の学びについて、キーワードになる「主体性」は「間」にあるとして、子どもとヒト(教師・子ども)、

子どもとモノ(教科書・教材・道具)、子どもとコト(活動・授業・教科・遊び)それぞれの間に主体性がうまれるということと、子どもが生まれる瞬間に敏感になり、安心して表現できる環境づくりが対話的で深い学びにつながるということを教えていただいた。

京都女子大学の水戸部修治先生からは、「読み解く力」育成のための視点として、「①読み解く力の重要性について共通理解を図る」「②学校の学習指導の質を高める」「③学校全体で取り組む」という3点をお話いただいた。特に日常の学習指導の質を高めるために、「読み解く力の獲得・活用」「読み解き再構築したことの発信」という3つのプロセスが質の高い学習過程の構築を生み出すこと、そのためには、子どもが目的を意識できる必然性のある交流の工夫を行うことが重要で、指導のねらいを明確に把握すること、決まりきった答えを探すのではなく、自分の考えを創り上げられる課題を工夫していくことが求められることを学力学習状況調査の問題を例に説明していただいた。

本年度から5年間の取り組みになるこのプロジェクトの前期が今年度から始まる。まだ手探りの部分もあるものの、まずは「読み解く力」について全員が共通理解を図れるように日々の授業改善から始めていきたいと考えている。まずは国語科の授業だけでなく、学校生活の全般で言葉にこだわって子どもたちと接していくなかで国語の力を伸ばしていきたいと考えている。
(彦根市立城南小学校)

授業の名言から考える 1
森 邦博

「教師は授業で勝負する」

授業研究会では、よく「教師は授業で勝負する」と教えられた。言うまでもなく「島小教育」(群馬県)と言われる斎藤喜博(群馬県)と実践を表す言葉である。「斎藤喜博」追いて吾らの熱かりきちようちん学校と椰楡されにつつ」(兵庫県)青田綾子作 朝日歌壇65年2月28日入選歌 選者近藤芳美」と歌われている通り、全国に斎藤実践を追い求める教師を生むほどに影響力が大きかったという。

特に私にとって授業づくりを考える上で大切にしたいと考えている「名言」は、自分の「授業の再現」・「授業を描写」できることを求めたということである。授業の再現ができない、授業の描写力が弱いということは、子ども一人ひとりを確かにつかまえていない、授業を的確につかまえていないということでもあるという教えである。

授業の再現力・描写力をつけることが、授業で子どもを大きく育てる教師力の向上になるとの教えだと受け止め、自分の授業の再現を試みた。なんと難しいことが、自分の力不足を痛感するばかりだったことを告白せざるを得ない。

公開・研究授業の助言を求められる立場で教室に向かう機会をいただくことがある今の私は、拙いなりにも懸命に授業の再現に努めるようにしている。そのプロセスで気づいたこと・発見したこと・問題点・改善の方策が語れるように努めたいと考えている。

「子どもはつまずきの天才である」

コウノトリの里兵庫県豊岡市(旧出石群但東村)の東井義雄記念館を訪れた。そこで次の文章が心に突き刺さった。

・子供はつまずきの天才である。思いもよらぬつまずきを平気でやつてのける。しかし、考えてみると、子供はわけもなくつまずいているのではないようである。子供のつまずきの底に、子供をつまずかせの何かがあるようである。

・つまずき」分析をすると指導のための宝物が見えてくる。学期末を迎えるたびに、私は長嘆息する。手に持つペンは遅々として進まない。自分を表現する力が出来たぞーと賞め続けてきた遅進児T君。あんなにがんばっていたのに、通知表に記入しなければならぬのは、やっぱり『2』だ。遂には目を瞑って『2』と書き込む。そしてまた、ため息をつく。(略)。……終業式

後、通知表を渡し終えた私は、いつだって類のこわばるのを感ずる

東井実践では、「子供はある法則に基づいてつまずいている」と見て考察を加え授業を改善していくという。

斎藤喜博氏の授業論での「『Oちゃん式まちがい』を生かす」という主張に相通するものがある。

たしかにつまずきの理由や原因を観察していくと、傾向や予測・推測ができるようになってきたりするようになる。そうするとつまずきを否定するのではなく、「味わう」というか指導にゆとりや幅ができてくるから不思議である。授業改善の視点が見つかったりもするのだ。また、「評定と評価」の相違を考えるようにもなった。そして、授業に生きる評価は、何より学習者の学習意欲を高め、自分の学びを納得できる評価が大切であるとの考えに納得ができるようになった。授業中の評価活動も、子どもの学習に生きるための評価でありたいと考えられるようになった。授業において、子どものつまずきを生かすことによって、子どもの学習を改善する、つまり「形成的評価」の大切さの気づきである。

(京都女子大非常勤講師) つづく

編集後記

▼四月例会(四四五回)は令和元年度研究内容と方向・研究日程・研究方法を考えた。研修として俳句の授業(好光さん)を行った▼研究内容は学習指導要領の考え方である「主体的・対話的で深い学び」ができる子を育てる国語科の授業を実践的に研究すること。実践的というものは、子どもたちの視点と明確にしよという考えである。国語科が言葉に責任を持つ子、場や相手に応じた「対話」ができることにより「深い学び」になる(国語学力)授業づくりをめざすことについて理解した▼研修では模擬授業「俳句」(授業者好光幹雄さん)が行った。野外観察や遊歩を楽しみながら俳句を作るという意識を持つことから始まり「若葉」をキーワードに語彙を広げる(若葉風・窓若葉・楠若葉等)「夢の中(上五)○○○(中七)あそんでる(下五)」の中七を考える俳句づくり入門の実際を学び合った。(当日の作品は次の通り)

▼俳句(兼題若葉・ゆめのなか・当季雑詠)ゆめの中若葉のトンネル服そめる(森) 校庭に子の歓声や若葉風(三上) 忙中閑新米教頭藤若葉(池寄) 久々の父は寝床で窓若葉(蜂屋) ゆめの中新樹の光とあそんでる(好光) 照れながらカーネーションをありがとう(川端) 四十八の靴をとぼして若葉晴れ(勝矢) 校門の先かけ上がる楠若葉(北島) 若葉風初めてできた逆上がり(吉永) 平成から令和へつなぐ若葉風(高野)

(吉永幸司)